

サクラ栽培品種の系譜をたどる



写真1 国立遺伝学研究所で栽培されている「牡丹」の花

多摩森林科学園 主任研究員 勝木 俊雄

サクラの栽培品種は数が多く、300以上もあるという人もいます。数多い栽培品種の中には、同じ名前でも異なる形質をもつものがある一方、異なる名前でも同じ形質をもつものもあります。中には明らかな取り違えによつて、不適切な名前が誤用されていることもあります。こうした同名異種、あるいは異名同種といった混乱が生じていると、栽培品種を適切に利用することが出来ません。では「正しい栽培品種名」はどのように確認すればよいのでしょうか。現在、国立遺伝学研究所で栽培されている「牡丹」(写真1)を例にとつて考えてみましょう。

多くのサクラの栽培品種は接ぎ木で増殖されますので、増殖元となった原木があるはずです。その原木と比較することで、正しくその栽培品種なのかを確認することが出来ます。さすがに、江戸時代に生まれた伝統的なサクラの栽培品種の多くは本来の原木が失われていますが、100年前までは遡ることが可能です。というのも、明治時代になって人々の



写真2 江北村に集められた「荒川コレクション」のサクラ (Miyoshi 1916)



図1 Miyoshi (1916) に記載されている「牡丹」



写真3 国立科学博物館に保存されている「荒川コレクション」の「牡丹」の標本

関心が薄れたことから消失の危機に瀕した江戸期のサクラ栽培品種が、130年前に東京の江北村（現足立区）の荒川堤に収集、植栽されたのです。この「荒川コレクション」に植えられた多くのサクラ栽培品種（写真2）が学術的に命名・発表されており、その資料が現代に残されているのです。

図1は、牡丹、という栽培品種について、

「荒川コレクション」にもとづき、東京大学の三好学教授が学術誌に発表した文章と図です。この記載により、本来の「牡丹」の花のおおよその形態は判ります。しかし、よく似た栽培品種と識別するためには、これだけでは不十分です。本来の「牡丹」の標本を用いて、葉や萼などの形態について詳細に比較することが必要です。三好教授は残念ながらほとん

ど記載のもととなった標本を残していませんが、同時代に牧野富太郎博士によって採取された標本が国立科学博物館などに保存されています（写真3）。遺伝研の「牡丹」と、牧野富太郎博士が残した「牡丹」の標本を比較したところ、同じ形態であると判断されました。この結果、遺伝研のサクラは正しく栽培品種の「牡丹」と考えられるのです。